

幕末と明治初年の日記を読む 解説

1 資料について～比企郡番匠村(現ときがわ町) 小室家文書

(1) 番匠村について

- ・ 秩父山地から関東平野に続く途中の緩やかな斜面＝都幾川の河岸段丘上に位置し、JR 八高線明覚駅がある。
- ・ 元禄 10 年 (1697) に幕府領から旗本佐久間氏知行地となる。村高 2 3 6 石 (元禄郷帳)、畑方約 25 町、田方約 5 町 (寛文 8 年 (1668) 「御縄打水帳」小室家文書 11～14)。
- ・ 江戸までの行程 16 里 (「新編武蔵風土記稿」、明治初年の戸数 68 戸、人口男 157 人、女 152 人、産業は米や繭を多く産し養蚕と絹取引が盛んな地域 (『武蔵国郡村誌』) であった。

(2) 小室家について

- ・ 元は竹内姓で戦国時代には、越後の上杉氏に仕え、その後、越前国足羽郡に移住し福井藩の藩士として 100 石を知行していたという。
- ・ 初代田代元貞 元禄 15 年 (1702) ～安永 6 年 (1777)
享保年間 (1716～36) に鎌倉、さらに江戸へと移住。望月三英 (幕府表番医師、奥医師 漢方医学) の塾で医道を学び、医を生業としての遊歴の後、番匠村に落ち着いた。
- ・ 二代田代通仙 享保 17 年 (1732) ～文化 3 年 (1806)
- ・ 三代小室元長 明和元年 (1764) ～安政元年 (1854) 91 歳
江戸で幕府医官山田凶南に医学を学んだ後、賀川流産科術 (近江国彦根出身で鍼灸や古医方を学んだ賀川玄悦が独学で生み出した助産術) を修得。蘭方医学にも関心を強め、家塾如達堂で多くの門人を指導した。医師であるとともに、享和年間 (1801～04) には名主後見、文化 9 年 (1812) 前後には名主役。
- ・ 四代小室元貞 寛政元年 (1789) ～安政 5 年 (1858) 70 歳
西洋産科の祖と称せられる足立長雋 (丹波篠山藩主侍医) に師事し、文政 7～8 年 (1824～25) 頃に如達堂主を、続いて文政 10 年 (1827) に家督を継承した。
- ・ 五代小室元長 文政 5 年 (1822) ～明治 18 年 (1885) 64 歳
14 歳頃から祖父や父に学びながら地域の医療につくようになり、安政 5 年の父の死去にともない家督を継ぎ家塾如達堂も継承したようである。師事した忍藩の儒学・漢学者芳川波山や後に佐倉順天堂二代目堂主となる佐藤春海 (尚中) らとの交流がしられる。維

新後には入間県医学所出仕にも任命されている。

医師としてのほか、幕末の名主後見職のほか、地租改正や戸籍調査など、村政や地域のまとめ役としても活躍した。明治8年(1875)に54歳で家督を譲った後は、古物や古文書の蒐集にいそしみ、随筆・詩文・古記録などの編さん物を多く残した「好古家」として知られる。

(3) 小室家文書について

- ・ 総点数7, 622点(埼玉県指定有形文化財 歴史資料)
- ・ 近世・近代文書は634点で、医学書や医事記録、書簡、典籍、書画・拓本などに特色がある。

(4) 小室家日記について

- ・ 三代元長日記25冊、四代元貞24冊、五代元長17冊の延べ66冊が確認されている。
- ・ 内容は、近世後期から明治初期にかけての医療の様相、医師・蘭学者・漢学者・俳人といった人びととの交流の様子、村落や人びとの暮らしの諸相を伝える。
- ・ 五代元長の日記は安政5年8月に起筆され、翌年11月まで七冊が書き継がれた。その後幕末には文久2年(1862)正月元旦から8月18日までの三冊が確認される。維新後は明治5年から8年のものが残されている。

2 取り上げたテキストについて

(1) 全体について

- ・ 五代元長の日記のうち、江戸時代の最後(史料1)と明治時代の最初(史料2、3)を取り上げた。講習会では近世を中心に中世と近代の文書も見ていただいたが、講習会の最後として、同一人の手になる日記により、近世から近代への変化を見ていただきたい。
- ・ 文久2年と明治5年の間の日記が残されておらず、連続していないのが残念だが、一見して書体の違い(和様と唐様)の違いがわかる。具体的には3(1)を参照いただきたいが、新政府は書体のうえでも江戸幕府が採用していた和様の「御家流」を否定したとも考えられ、それが公式の文書だけでなく、最も私的な文書ともいえる日記に反映していることが興味深い。
- ・ くずし字の難易度としては、日記、書状は最も難易度が高い部類に属する。今回初めて古文書解読にチャレンジされた方には、とくに史料1は難しいテキストとなっている。公式の文書に丁寧にきち

んと崩したものの対比として、自分（あるいは子孫）がわかればいい日記は崩が激しく、また、個性（書き癖）が強くなるためである。ただ、講習会最後のテキストとして、そのようなくずし字も知っていただきたい。

（２）史料 1 について

- ・ 史料 1 は江戸時代最後の日記の最終盤にあたる文久 2 年 8 月 1 日の途中から 16 日までの部分に加え、写真が小さいが表紙と最末尾の 18 日部分を付した。
- ・ ただし、本文中にも「廃筆」とあるように、3 日から 14 日は往診に忙殺され、日記を記すのを諦めており具体的な記述はない。冊子には 18 日で記載が終わった以降も白紙の丁（ページ）が沢山残っており、書く余裕がなくなり途絶えたのではないかと想像される。
- ・ その多忙さを示すように、日記の内容はほとんど往診先の列挙に終始しており、毎日夜半か鶏鳴（鶏が鳴く夜明け）に帰宅するような状況であった。その爆発的な往診先発生理由は書かれていないが、文久 2 年 7 月から 8 月という時期は、江戸や周辺地域で麻疹（はしか）、つづいてコレラが大流行している時期である。連日夜を徹して奔走する医師の姿、そして、そのさなかに途絶えてしまう日記には、直接の記述以上に緊迫した社会情勢を伝えるものがあるように思える。

（３）史料 2、3 について

- ・ 史料 2 は維新後最初の日記の冒頭である、明治 5 年元旦から 2 日にかけての部分。資料 10 から引き続き元長は自分のことを「亭主」と記しているが、次の史料 3 では「余」「老拙」と変わる。
- ・ 史料 3 は翌 6 年の同じく正月元旦から 2 日にかけての部分。史料 3 の冒頭に「明治六癸酉年一月一日、即旧曆壬申十二月三日」とあるように、太陰暦から太陽暦への改暦という一大変革があった。番匠村や小室家の正月にどのような変化があったかを対比する意味で取り上げた。
- ・ 改暦が、いつ、どのように番匠村や小室家に伝えられたかは、3（3）に日記からの抜粋を記しておいたので参照されたいが、10 月 29 日には、陰暦の暦を貰い「来年は六月が閏月だ」などと記しており、全く改暦を関知していなかったことがわかる。政府による正式の布告は 11 月 9 日付けだが、元長が風聞で知ったのは 15 日であり、17 日に布令書自体を見ている。改元まで半月しかない時期のことである。
- ・ 暦に関する日記記載の変化では、江戸時代には書かなかった干支が書かれるようになっている（5 年元旦でいえば「丙戌」）。また、テキ

ストの時期にはないが、明治8年には曜日が併記されるようになるが、同年の日記の裏表紙には「日月火水木金土」とメモ書きがあり、元長にとっても新たな慣習であったことが想像される。

- ・ 正月行事の変化を見ると、明治5年の元旦には屠蘇・雑煮を祝い、村内から皆が新年の挨拶に訪れ、素麺を出して振る舞っている。翌2日は元長が年始に出かけている。これに対し6年は屠蘇を廃して清酒にし、年寄りから子供まで雑煮で祝った、とある。屠蘇だけでなく門松や年玉も廃されている。歳神の棚もこしらえず、かわって榊の枝に四垂（紙垂）をさげる、という変化がみられる。維新後に小室家の菩提寺である医光寺が廃寺になるなど、神仏分離の影響も考えられる。一方、村内外との年始の挨拶回りには変わりがない様子がうかがわれる。
- ・ 正月行事とは別に、明治5年の元旦には元長の次男で当主を継ぐことになる恭平（6代元貞）の妻やすが男子を出産、「母子とも健全」という慶事もあった。

3 幕末と明治の比較

(1) 書体

① 御家流（青蓮院流、尊円流、粟田流）

尊円親王(1298-1356 伏見天皇第6皇子、青蓮院35代門跡)を祖とする「和様」の主流。

- ・ 曲線的でやわらかい線質。
- ・ 江戸幕府の公文書書体とされ、武士や庶民の消息、日記、和歌、あるいは寺子屋の手本など、実用書体として江戸時代の日常生活に広範に使用された。

② 唐様

「和様」に対し、「中国風の書体」。主に宋・元・明の書人の書風に学んだ書体。習得した書風に書き手の自己表現が加えられ多様。

- ・ シャープで角ばった線質。
- ・ 知識階級が必須とした儒学や漢詩文に用いられた。僧や儒者、武士階級から庶民まで漢詩文への関心が高まるなかでひろまる。

(2) 文体～変体漢文

正格の漢文（純漢文）に対する概念。和化漢文ともいう。原則として漢字がもっぱら使用され、漢文様式をもつ文章でありながら、正規の漢文には用いられない語彙・語法・語序・用字法をもった日本化した漢文。この文体については、元長の日記で大きな変化はみられない。

(3) 曆

干支による紀日：明治5年1月1日～4月20日

明治8年1月1日～2月28日 曜日と併用

※ 裏表紙に「日月火水木金土」

午前、午後：午前の初出は明治5年8月25日

午後の初出は安政5年8月30日

明治5年11月9日太政官布告第337号（改曆ノ布告）

10月29日条

昨日川越和泉屋健造、峰岸戸長一同来リ、菓謝式分外ニ来癸酉年東京曆一冊惠候、六月閏也、

11月15日条

来月三日を以一日ト被定候趣、此日風聞有之候処、昨日今市村会所へ御触達ニ相成候由

第百七十九号

今般 詔書ヲ以自今旧曆ヲ廢シ、太陽曆ヲ用ヒ、天下永世之ヲ遵行セシムヘク被仰出、依テ来ル十二月三日ヲ以明治六年一月一日ト被定候旨別紙之通被仰出候事

右及布告候条、区々無洩相達、猶可触示もの也

同月17日条

恭平上野平八よりツクネ仲右衛門へ行、越生会所へ立寄、御布令書拜見、太陽曆追而御頒行相成候由

4 語句の解説

(1) 語句

- ・ 晡（ほ）：申の刻。午後4時頃。夕方。
- ・ 四垂（しで）：紙垂、四手、垂とも書く。神前に供する玉串、注連縄などに垂れ下げるもの。
- ・ 歳神：五穀を守るといふ神。五穀の豊年を祈る神。
【歳徳神 としとくじん】その年の福德をつかさどる神。この神の在る方角を明（あき）の方または恵方といい、万事に吉とする。
- ・ 闔（こう）村：村中。全村。
- ・ 末廣：扇を祝ってという語。

(2) 登場人物と地名

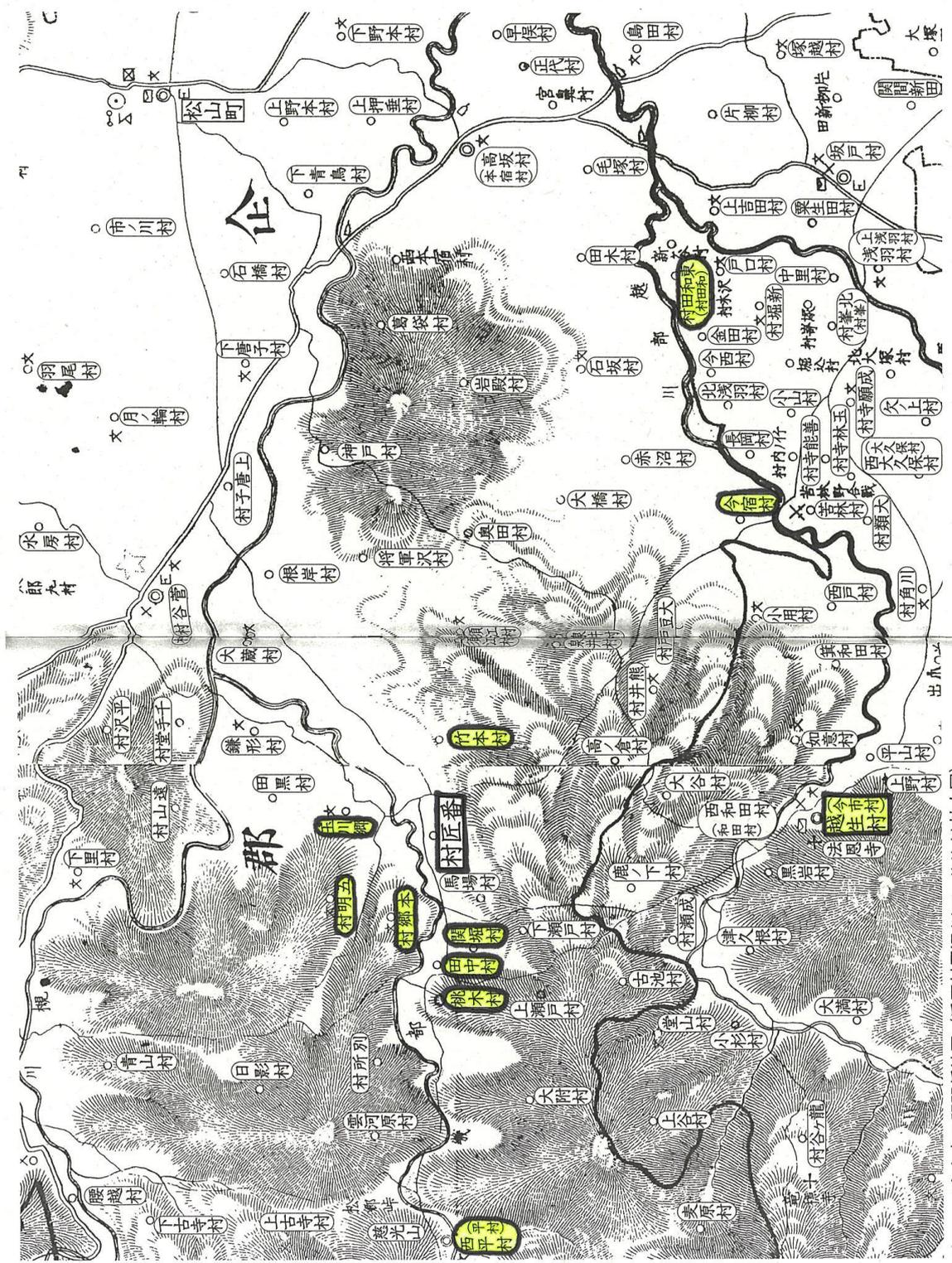
- ・ 和田：入間郡和田村。明治12年に東和田村と改称。現坂戸市東和

田。

- ・ 越生：入間郡今市村。中世越生郷の中心地で古くから市が立った。明治6年に越生村に改称。現越生町越生。
- ・ 桃木：比企郡桃木村。現ときがわ町桃木。
- ・ 坂本：桃木村の旧家。元長の次女だいが嫁いだ。
- ・ 峰岸：比企郡平村の旧家。元長の長女さのが嫁いだ。平村は明治12年に西平村に改称、現ときがわ町西平。
- ・ 田中：比企郡田中村。現ときがわ町田中。
- ・ 元昇：安政5年入門の秩父郡野上村（現長瀨町）出身の弟子。当時在塾中。
- ・ 大塚：比企郡大塚村。明治12年に西大塚村と改称。現小川町大塚。
- ・ 下小川：比企郡小川村。現小川町小川。
- ・ 竹本：比企郡竹本村。現鳩山町竹本。
- ・ 今宿：比企郡今宿村。現鳩山町今宿。
- ・ 二本木：入間郡二本木村。現入間市二本木。
- ・ 一市（ひといち）：比企郡玉川郷。現ときがわ町玉川。
- ・ 関堀：比企郡関堀村。現ときがわ町関堀。
- ・ 大野：比企郡大野村。現ときがわ町大野。
- ・ 竹海戸：比企郡大野村。現ときがわ町大野。
- ・ 唐沢：比企郡玉川郷。現ときがわ町玉川。
- ・ 本郷：比企郡本郷村。現ときがわ町本郷。
- ・ 五明：比企郡五明村。現ときがわ町五明。
- ・ 栗海戸（くりがやと）：比企郡五明村。現ときがわ町五明。
- ・ 日尺（にっしゃく）：比企郡平村。現ときがわ町西平。
- ・ 玉川：比企郡玉川郷。現ときがわ町玉川。
- ・ 中野：比企郡五明村。現ときがわ町五明。
- ・ やす：小室家6代当主元貞（恭平）妻。
- ・ 林村：入間郡林村。現所沢市林。
- ・ 佐久間：やすの実家、佐久間武右衛門。
- ・ 恭平：元長次男。小室家6代当主元貞。恭平は幼名。
- ・ 根際（ねぎわ）：比企郡玉川郷。現ときがわ町玉川。
- ・ 五三：元長三男勤。五三（五蔵）は幼名。

※ 番匠村及び近隣の村については次頁地図（『埼玉県史料叢書 23 小室家文書 2 四代小室元貞日記』より転載加筆）参照。

本テキストを含む五代小室元長の全日記は、『埼玉県史料叢書 24 小室家文書 3 五代小室元長日記』に収録されています。



地図2 小室家日記関係地図 (番匠村周辺地図1 枠線内) 拡大図
 第22~24巻所収の日記で往き来のある町村を○で示した。また字名は別表に一覧した。